

一時保存して置いたりボン状のアラメは人手の出来た時、淡水にもどし、煮てから“板アラメ”に作製する。また煮上ったものをそのまま調味して食用にも供する。“板アラメ”を食膳に供する時は半日乃至1日、水または湯に浸して置き、軟かくしてから用いる。

結 辞

“板アラメ”(Brick-aramé)は日本海に産するツルアラメ(*Ecklonia stolonifera* OKAM.)を原藻とし、佐渡に於いてのみ加工せられ、興味深きものであるので、その製法について調査し、纏めてみた。特に北海道大学・山田幸男教授のおすすりめもあり、色々と御示教を得た。此処に謹んで感謝の意を捧げたい。

参 考 文 献

OKAMURA, K.: *Icones of Japanese Algae* vol. 3 (1916), p. 172, pl. 140. 山田幸男・木下虎一郎: 北海道海産動植物図譜, 海藻篇第2輯 (1949), p. 7, pl. 34. 遠藤吉三郎: 海産植物学 (1911), p. 422.

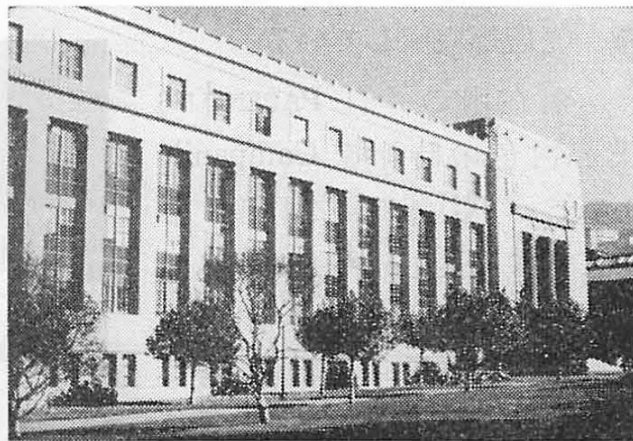
ア メ リ カ を 巡 り て (II)

瀬 木 紀 男

T. SEGI: My visit to America (III)

(7) ロスアンゼルスから再びサンフランシスコへ

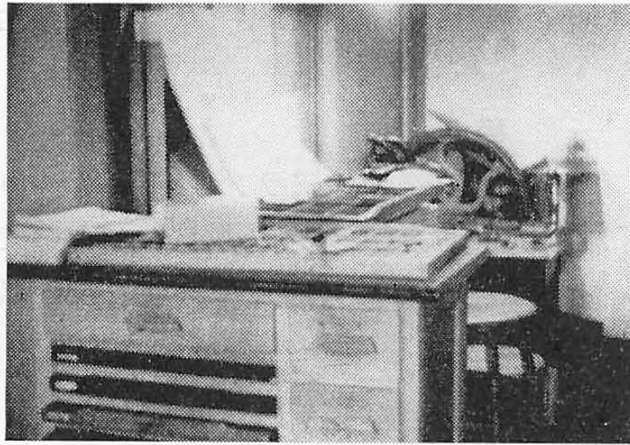
ロスの滞在を終り10月3日朝再びシスコへ向う。ロスの新空港は各航空会社が夫々独立の専用ビルを持つ素晴しく大きなもので、待合室から渡り廊下が飛行機の昇降口に延び、地面に降りず直接乗り込める様になっている。UALで1時間半程飛んでシスコへ到着したが、偶然



加州大学の Life Sciences Building
(藻類学教室は8階にあり)

新崎博士と同じホテルで好都合であった。翌朝早速パークレーの加州大学を

10年振りで訪れた。既に山田、田中、時田諸先生が来訪され、又目下千原氏が滞在しておられるお馴染の大学である。折良く PAPENFUSS 教授, SILVA

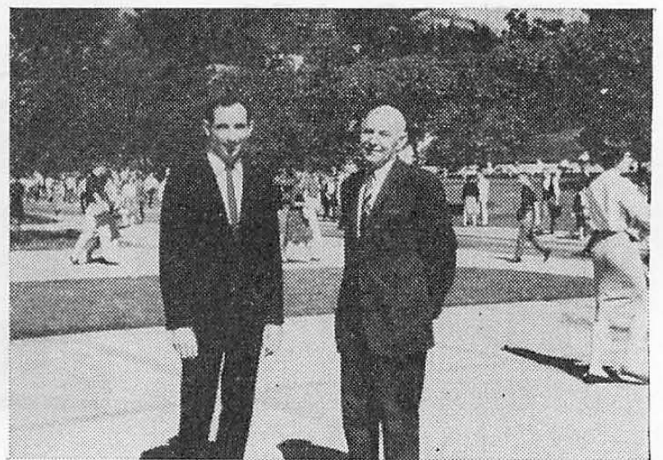


藻類学教室(腊葉室)入口にある印刷機
(加州大学, Life Sciences Building 内)

博士共に面会出来、お互の健在を祝した。藻類学教室は Life Sciences Building の 8 階にあり、入口には印刷機があつて簡単なものは自ら印刷出来る様になっている。室内の状況は在室の人が変っているだけで昔と少しも変わらず懐しかった。然し小生のシカゴ滞在中に起つた飛行機事故で、研究員の GORDON 氏が思いがけなく惨死したと

SILVA 氏が涙ながらに語つた。お昼休みに同氏と美しいキャンパスを歩き、立並ぶ学生のピラや立札を見ながら Sather gate から外へ出ると、新しく出来た Student center が展開する。右方には屋根の高さが夫々違つた学生食堂が一齊に立並び、左方には Auditorium, office building, Student Union 等がある。この池にはいつも番をしているという名物の犬がいる。この辺一帯色とりどりの各国の服装をした学生が行き通り、如何にも国際色豊かである。猶、Student Union (学生会館) は州費は全く使わず学生関係の寄附金のみで出来たもので、lounges, ballroom, meeting rooms, game rooms, 学生食堂、売店等完備している。

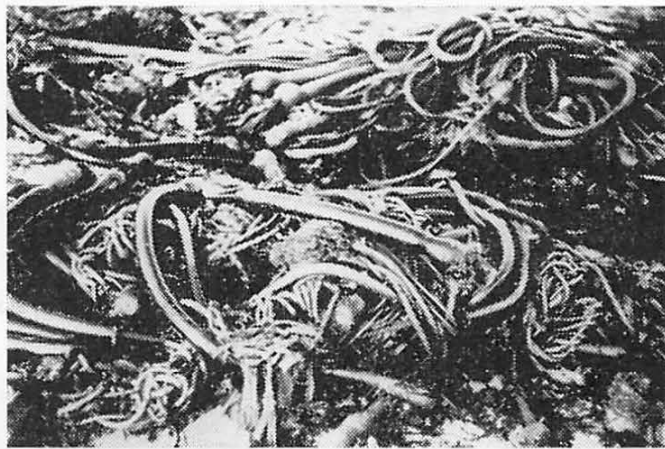
滞在中の一日 PAPENFUSS 氏と白色の時計塔 Campanile tower へ上り、四周を見渡すと果てしなく美しいキャンパスが広がる。山上には放射能研究所、中腹には競技場、音楽堂、寄宿舎をはじめ各教室のビルが限りなく立並び絵の様に美しい。ここから Durant Hall を訪れたが、ここは東洋専門の蔵書が多



パーペンフス教授(右)とシルヴァー博士
(加州大学構内にて)

い。また滞在中 SILVA 氏の好意で Golden Park 内の Steinhart Aquarium を訪れた。同館は目下一部修理中であったが、Triggers (Trigga Fishes ボタンを押すとカニの餌が降下する仕掛あり)、Sand Tiger Sharks, Flippy (大亀, Key-West 産), Deadly Stonefish (Squirrels tropical, Indo pacific 産), Medaka (Japanese Rice fish), Wolf-Eel (Sea Anemone と居る), Piranha (Amazon 産), Talking fish (Yellowish, Spotfin Croaker) 等興味深かった。この帰りに有名な Fisherman's Wharf を訪れたが、漁船は美しくペンキで塗られ、又魚市場では巨大なエビ (イセエビの3~4倍もある) に驚いた。

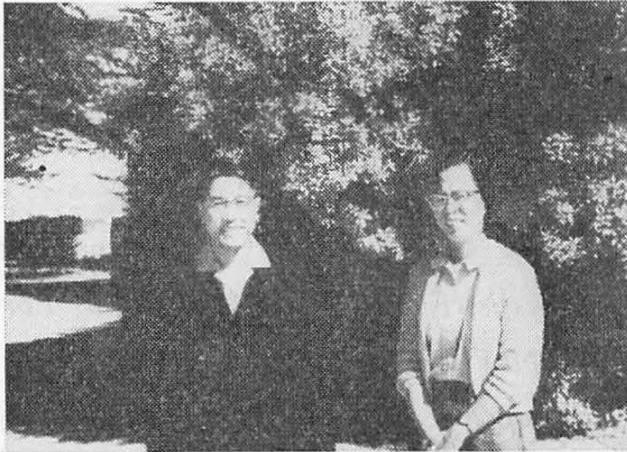
10月9日 SILVA 氏の車で新崎氏と共に Moss Beach へ採集に行った。約2~3時間ドライブし、見渡す限りの住宅地帯、Westlake 等を過ぎると褐色の荒削りの海岸地帯が続きいかにも大陸的だ。間もなく Moss Beach に着き *Laminaria*, *Gloiophloea*, *Nereocystis*, *Fucus*, *Egregia*, *Ptilota*, *Porphyra*, *Gigartina*, *Agardhiella*, *Erythrophyllum*, *Oputiella*, *Gastroclonium*, *Botryoglossum*, *Hymenena*, *Pikea*, *Halosaccion*, *Pterosiphonia*, *Gelidium* 等30余种採集することが出来たが、殊に印象深かったのは巨大な *Nereocystis* が一面にうず高く積み上げられている風景であった。



うず高く積った *Nereocystis*
(Moss Beach 海岸にて)

10月11日には同じく3人で Pacific grove へ向い、2時間程ドライブして Palo alto の Stanford 大学に着く。医学部は壁が粗い目のように作っており、天井から大きな鉢植が吊り下げて飾られ、前庭には数々の美しい噴水がある。スーパーマーケット、工学部附属の工場等があるところはいかにも私大らしい。ここを通過して暫らくすると山に入る。この辺一帯は Big basine State Park と称する森林公園で、Red wood の巨木がうっそうとして立並ぶ。Monterey の20カ国の外国語を教える Army language School を過ぎ、夕方 Hopkins Marine Station に漸く到着して Dr. ABBOTT と再会した。この実験所前には沢山の白い鳥 California Gull (Cormorant fishing に使う) がとび立ち、右岸には魚

市場水産関係の工場(缶詰等)がある。この附近の海藻は既に ABBOTT 女史が採集準備しておいてくれたが *Gelidium*, *Pelvetia*, *Enteromorpha*, *Batriocladia*, *Callophyllis*, *Plocamium*, *Laurencia*, *Batryoglossum*, 又 *Macrocystis* 上にあるもので, HOLLENBERG 教授により *Polysiphonia* と *life history* が相違すると研究された *Pterochondria woodii* 等あり興味深かった。夕方



アボット女史(右)と筆者
(Hopkins Marine Station 構内にて)



見渡す限り浮遊する *Nereocystis* (海岸近く)
と *Macrocystis* の群落
(Monterey Peninsula の海岸にて)

SILVA 氏の車で Monterey peninsula の所謂 17 mile ドライブに出かけた。この辺は私有地の為、入場料を払って入る。見渡すかぎりの公園, ゴルフ場, Cypress の美しい並木が果てしなく続き, 一方海岸には岸边に *Nereocystis* (プクプクと巨大な気胞が浮いている), 沖合には *Macrocystis* が浮遊して群落を作り海面が黒くなっている程で, 折からの夕闇の中で実に壮観であった。sea rock では *Califoania sea lion* のガァーガァーという鳴き声に対岸でもよく聞える。翌日は又 ABBOTT 女史の車で有名な避暑地 Carmel を訪れたが, 途中家ぐるみ包んで消毒している所をみて一寸興味深かった。Carmel Beach, Mission Point 等で沢山の打揚げ海藻を採集したが, *Alaria*, *Pterygophora*, *Desmarestia*, *Egregia*, *Dictyoneurum* 等の他, 丸太の如き *Nereocystis* が海岸に一斉に打上げ, 之に多くの *Macrocystis* も混り壮観であった。

滞在最後の昼頃 PAPENFUSS 教授宅を訪れたが, 此処も 10 年前と全く変わらなかった。ただ可愛い坊やであった令息の Mr. TEDDY は今は既に立派

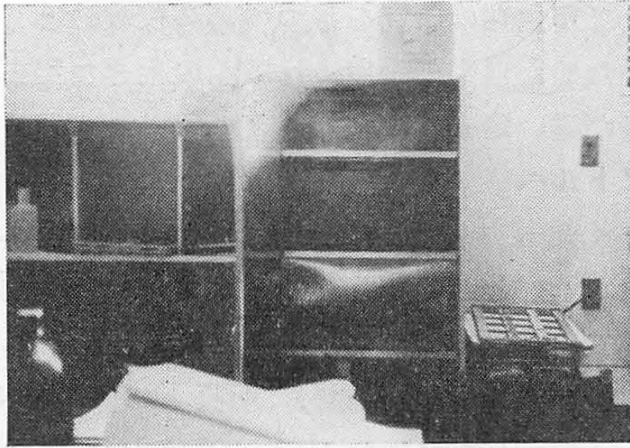
に成人され、目下アフリカのガーナで爬虫類の研究をしつつ、高校教諭として活躍しておられる由である。そのためか自宅の一室には多くの生きた爬虫類の採集があり、グロテスクな蛇等が這い廻っていた。

(8) サンフランシスコからシアトルへ

シスコの滞在もいつしか夢の如く過ぎ去り、10月15日午前9時UALでシアトルに向う。濃霧のため予定より大分遅れ2時間余もかかって漸く到着したが、まだ他の空港に着かなくて幸であったとのことである。翌日珍しく雨降りの中をワシントン大学の中央水産研究所を訪ね、所長 DONALDSON 博士と会見後、PALUMBO 博士の案内で所内を見学する。ここは Radiation Biology が活潑に研究されているが、PALUMBO 氏は藻類に関するラジオアイソトープ、藻類の生態に関する研究を行なっている。Mrs. SHORT の案内で地下室の御自慢の標本室(各国からの莫大な数にのぼる水棲動物あり)、Counter room での精密な機械装置をみ、且つ Fresh water algae についての説明を聞く。この一室では Fern lake で Alkaloid にて Carp, Sucker 等の夥しい魚が弊死している写真に注目をひいた。又この研究所構内の池では折から鮭の採卵が行なわれていて興味深かった。ここで放流したものはかなり北洋にて日本に捕獲され、この海岸には日本漁船のガラス製の大きな円い浮子(ウキ)が流れつく事もある由である。昼頃 PALUMBO, HELD 両氏と共に町をドライブする。北辺の地のせいか何となくうらぶれた感じもする。午後ワシントン大学の植物教室を訪ね、大学附属の Friday Harbor Laboratories にて海藻の ecology, cytology を受け持っている NEUSHUL 氏と種々語り、*Postelsia* の標本を戴き、又所長の FERNALD 氏と会見した。翌日町の中央にある Drive in Bank を訪ねたが、車から降りず直接用足しの出来る能率的な点アメリカらしく興味深かった。

(9) シアトルからバンクーバーへ

10月18日午前11時10分UALでシアトルを発ち、40分後バンクーバーに着いたが、幸い快晴に恵まれ機上から雪をいただいたカスケード山脈が美しくみえる。空港で簡単な検査の後、折柄留学中の林氏と PENNEY 氏の出迎えを受け、同氏宅に向った。秋酣の清々しい森林や田園地帯を過ぎ、昼過ぎ British Columbia 大学の Biological Science Building に SCAGEL 博士を訪ね、海藻実験室にて *Polysiphonia*, *Gelidium* の標本を検査することが出来た。この室には研究生として DRUEHL 氏と、ハワイ産の海藻研究中の LEE

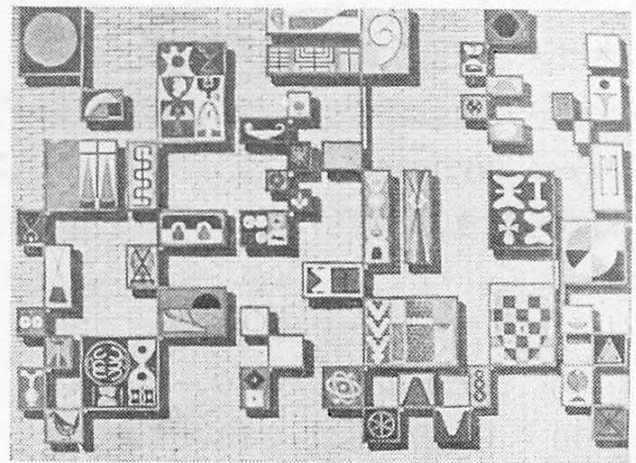


ドライヤー乾燥器(中央)一下部に電熱器,
上部の筒に換気扇あり
(ブリテイッシュ・コロンビア大学,
藻類学実験室にて)

氏が居られる。又ここにあるドライヤー乾燥器(下部には電熱器, 上部の煙突には換気扇のついた吸取紙乾燥箱)は一寸面白く注目された(写真参照)。この教室入口前の廊下には Green Algae (Mar. alg. of North Pacific) *Fryeella*, *Desmarestia*, *Egregia Menziesii*, Nori, Konbu 等が美しく展示されていた。構内は清潔で敷地が広く、灰色の落ち着いた英国風のビルが立並ん

で本当に爽快である。化学教室は超モダンで、小さな多数の窓は全部色ガラスが使われ、夜は内部の照明を通して様々な色を発する。海洋教室は木造で、ここに Dr. PICKAD を訪ねた。変わったものに Brock Hall Mural と云うものがあり、ビルの壁面に各学部の徽章が美しく展示してある。

大学の構内の一隅には日本庭園が造られ、石燈籠や有名な新渡戸稲造博士を記念する石碑が立っている。又立派な木造の日本家屋が建ち置、障子(ニューヨークの Haskins Laboratories でも内部に障子が仕切りとして使っている), 茶席まである立派なものである。まるで日本のどこかを歩いている様な錯覚にとらわれる。又構内の Faculty club で Dr. SCAGEL, Dr. COLE (女史), Dr. STEIN (女史) と屢々会食して色々 Discussion することが出来た他, COLE 女史の好意で *Alaria*, *Costaria*, *Laminaria*, *Macrocystis* の発生を、興味深



Brock Hall Mural

(各学部の徽章, 右端下部のものは水産学部—fish を示す, 中央上部のものは海洋学部—opposing currents を示す, 左端下部のものは生物学部—four reproductive symbols を示す, ブリテイッシュ・コロンビア大学にて)

く描いた映画 “The sexual reproduction of some brown algae” を観覧した。又この教室で頼まれて日本のノリについての講演を行なったり、もり沢山のスケジュールであった。

市中のスタンレー公園も2度程ドライブすることが出来たが、リスがすぐ目の前をピョンピョンと人なつこくとび廻っているという長閑さであった。ここにかけて日本に渡航した S.S. Empress of Japan (1891~1922) の、木造の竜の彫刻のある舳 (Figurehead) が記念に展示してあるが、附近には *Nereocystis* がぶかぶか浮いている。

ここにある水族館は余り大きくはなかったが、内容は極めて充実している。水槽にいる Lingcod (*Ophiodon elongatus*), Giant skilfish (Mystery fish), Alligator snapping (Turtle, *Macroclermys temmineki*), Lionfish (*Pterois volitans*), Bat stingray (*Holorkinus Californica*) 等、前の池にいる Canada Otter も興味深かった。又実物の *Nereocystis* が、水槽に投入されて展示してある点は殊に注目された。

滞在中の10月21日朝 Friday Harbor Laboratories 及び Orcas Isl. へ採集に行くためバンクーバーからバスに乗り、国境を越えて再び米国領に入り、Anacortes から大きな連絡船 (中に多数のカーを入れる) に乗って夕方漸く Friday Harbor に着いた。Mr. GROSE の出迎えをうけ、所長 Dr. FERNALD と再見し得て好都合であった。此処はかつて山田先生が来訪された所で、森の中にポツンポツンと独立した一戸建の宿舎、研究所が並んでいる。目下大実験室の建築工事中で、之に日本式建築が加味されるとの事である。翌日この辺一帯の採集を行なった後 Orcas Isl. に向った。ここは例の KYLIN の *Orcasia* の原産地で、*Polysiphonia senticulosa* HARVEY は枝が内生的に出来るという理由で *Orcasia* に属せしめられた。ここも筆者としては是非訪れたい処であった。*Orcasia* の type は既に Lund で筆者が精査したが、之



スケジュール博士(右), スタイン女史(中央)
及びコール女史(左)
(ブリティッシュ・コロンビア大学,
Faculty club 前にて)



オルカス島の遠望

(連絡船上より)

と近似の多数の紅藻を採集する事が出来た。猶、ホテルの売店に、画面が真黒で何も写っていないエハガキがあったので不思議に思い、店主の親爺に聞くと、得意げに“*No light*”と答えた。オルカス島の夜は暗い。何処へ行っても人工の灯の輝くアメリカでは、*No light* であることも一つの特長らしい。

(10) バンクーバーから帰国の途へ

10月25日いよいよ帰国の時が来た。奇しくも丁度カナダ国首相も、同日日本訪問の旅に特別機で出られたが、途中故障で一旦引き返されたとの事である。筆者のCPAは定刻出発したが、僅か十数人の乗客のみで、ガラあきであった。途中Anchorageに思いがけなく着陸したが、4年前渡欧の時寄った際と全然変りなく、懐しかった。ここは既に氷雪におおわれ、雪や氷をふんで附近を散歩する。少憩後再び舞い上り、アラスカ大陸の上をゆく。ジェット機のため飛ぶというより、大気の中につき込んでゆくという感じである。周囲は成層圏でうす青く、壮絶を極める。アラスカ大陸が遙か雲の下に横たわる。出発後10時間、夜となって機は間もなく東京着とのアナウンスと共にぐんぐんと下る気配を感じ羽田に着陸。車輪の響きがピンピンと響き、とにかく日本に安着してホッとする。又ごちゃごちゃした日本に帰り、嬉しいようなもっと居たかったような複雑な気持であった。(完)

(三重県立大学水産学部)